

てみた。すると、「直接質問に答える」というので、電話に出させた。

警察官の質問に対し、娘はやはり、「Jちゃんの居所を知らない」と返答したため、次女への質問は終わった。警察官は私に、「彼女はJちゃんの行方を知らないようだが、念のため、自宅を訪問したいがいいか」と問われ、「結構です」と答え、警察官がやってくるのを二人して待った。

訪れた警察官は、娘に配慮してのことか、電話で質問した係官とは別の女性の警察官だった。次女との会話はほんの10分くらいですんだ。そして、その警察官はきちんと、次女が「Jちゃんのことについて知っている様子はないと確認できたので、警察がこれ以上関係することはない」と、はっきり言ってくれた。しかし、Jちゃんが未成年者であり、彼女の両親が警察への家出人捜索の依頼を取り下げない限り捜査は続くので、彼女について分かったら、何でもいから連絡してほしいと頼み、帰っていった。

警察官が帰ってしまった後、Jちゃんの件はすんだかに思えたが、内心、あれほど次女と仲良しのJちゃんが、「家出」などという大事なことを娘に黙っているだろうか？と、ふと私は疑問に思った。「あなた、本当にJちゃんの居所知らないの？」と、次女からひんしゅくを買う覚悟で聞いてみた。それに対する次女の答えは、「日本ではどうなのか知らないけど」と前置きし、「Jちゃんがいくら私に自分の居所を教えたくても、彼女は仲のいい私にだけは決して言わないのよ。なぜだか分かる？」「それはね、私がJちゃんの居所を知っているのに、もし彼女の両親や警察に教えなければ、私が罪に問われることを知っているからよ。だから親友の私にだけは絶対言わないし、また、彼女に私のことで心配をかけたくないから、私も聞かない。」と言ったのだ。この次女の言葉で、警察官がなぜ、これ以上警察が娘に関わることがないと断言できたのか、はっきりその理由を理解したのだ。

次女の説明を聞いて、どこでトラブルを回避する知識を

得たのか、また、その知識を持った上で、きちんと自分の身を守ることを知っている、という事が驚きだった。次女が私に説明してくれことは、残念ながらアメリカ社会をよく知らない私の子育てから教わったものではなく、主に学校において、そのような社会的ルールを学んでいる、と次女は教えてくれた。

このJちゃんの家出騒動で、子ども達が、アメリカでトラブルに遭遇した際の、ものの見方や対処の仕方、また、その解決方法を初めてみる思いがした。

私はいつでも私なりに一生懸命子育てしているつもりだった。それは、子ども達が私から日本語や日本のカルチャーを学んできたことで、分かる。反面、私自身がアメリカの学校での教育体験が全くないため、家庭ではほとんど補えないアメリカでの学問的な知識やカルチャーは、自然、日々の学校生活から学ぶことになる。何度もこのコラムに書いているが、私は子ども達の現地校での勉強や生活に対して、何かアドバイスをしてやりたくても、ほとんど子ども達任せできたのだ。

子ども達が家庭から一歩足を踏み出したとたん、彼女らがいかに学校でしっかり学んでくるかによって、アメリカでの生活が大きく違ってくるという事を、私自身が自覚すること度々だ。

☆

今回までの三回を通じて、我が家の子ども達が関わったトラブルについて書いてきた。ここに挙げたトラブルなどは、私が知り得たほんのわずかな出来事なのだろうと思う。機会があればまた書きたいが、それにしても、このように子ども達が私のところへトラブルを運んでくることで、私自身が子ども達を見習いながら、アメリカ的な対処法を見よう見まねで、いろいろ学んできた。

「子育てとは親育て」だと、つくづく思う。

松本 康子

まつもと やすこ

1979年、夫の留学で、1歳半の長女を帯同し渡米。その後、アメリカで次女、三女を出産。専業主婦として子育てと教育を担当。

子ども達は、親から見てうらやましいほどの、バイリンガル・バイカルチャーの大人となった。

このコラムでは、「アメリカで日本人の子どもをバイリンガルに育てた」私と子どもの悪戦苦闘の姿を紹介。

編集長から一言

「トラブル」を通して、海外での子育てを考える、康子さんのエッセイの3回目です。

今回は、アメリカで育っている子ども達は、学校だけではなく、社会の中で育っているのだという、お話です。そんなことは当然なのですが、外国で生活している親にとっては、その社会の暗黙のルールは分かりません。実は、Jちゃんのご両親も、アジアの国で教育を受けて、一家でアメリカに移民してきた方達でした。

「海外での子育ては、子どもだけではなく母親・父親も育て、初めて可能になる」という康子さんの思いには、心から賛成します。